

藤園記念畫帖

児玉源太郎十三回忌記念【児玉家私家版】

秘蔵の「遺影残墨」が伝える
名将・児玉源太郎の素顔



マツノ書店

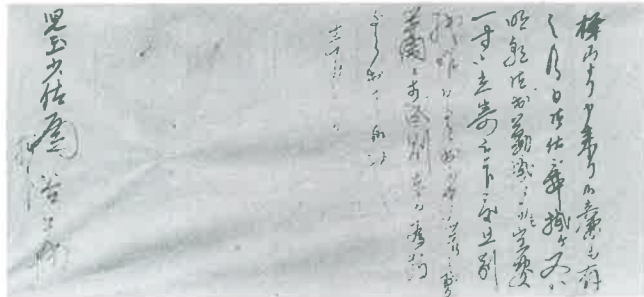


部令司總軍洲滿ルケ於ニ天奉

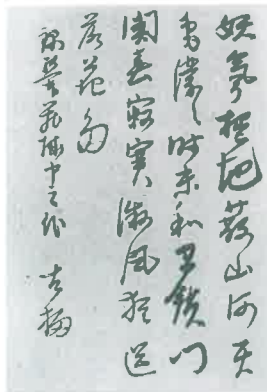
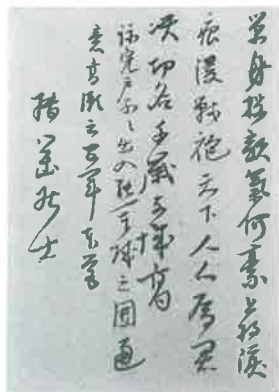


内容見本

(50%縮小)



年九十四代時佐少



代時佐西空

■ 現役のさなかに急逝した児玉源太郎についての史料は極めて限られております。

■ 本書は類書が皆無なだけでなく、この本自体も、当の児玉家をはじめ国立国会図書館、山口県立図書館、周南市立図書館にもなく、秋田、愛媛の県立図書館にしかない稀書です。

■ 長男・秀雄が丹精込めて編集した本書は、同時復刻する「児玉將軍十三回忌寄稿録」と共に、研究者はもとより児玉ファンにとっても、源太郎のたどった足跡や素顔を知るための原点であり、最高の記念碑かと思えます。

■ 本書の構成 前半は人物写真三十五枚、情景写真十六枚、書簡、遺筆等四十三枚。後半の「藤園小伝」は「藤園遺稿」を含め計六十七頁です。

■ 体裁 A4判上製箱入194頁

■ 定価 一万五千円(税込別)

■ 予約特価 一万二千円(税・干共)

■ 特価締切 22年10月31日

■ 刊行 22年12月上旬

■ 限定二百部 (番号入)

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13
 ☎0834②295
マツノ書店
 URL <http://www.matsuno.com>

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。

第四章 藤園將軍の幼年時代

藤園將軍は五歳にして父に死別し、八歳にして、藩學興讓館に入り、他の子弟と共に文武の教育を受け居たりしが、家庭に於ける將軍は慈仁に深き家母の哺育と慷慨氣節ある義兄の感化とを受けて早く已に忠君愛國の思想を涵養せられ、殊に興讓館に於ける藩儒島田蕃根翁の薰陶は、夙に將軍の小やかなる頭腦にも大義名分の何物たるかを印せしめたり、唯義兄の容貌魁偉なるに比して將軍は矩軀小兵常に同朋の輕侮する所となりしも、精神上に於ける義兄の感化は芝蘭の室自ら芳しきが如く何時しか正義型中の一人とはなれり、恁くて六七年の間は家母姉妹とを合せて一家六口、何事もなく月日を送りしが、禍福は緬へる繩の如く榮枯は循環して已む時なく、將軍十三歳の八月十二日義兄横死の變起りて一家は再び悲愁の淵に沈みぬ、將軍生前當時の光景を追想して家人に語るらく

八月十一日の夜半藩命ありて親族會議を開くべしとの沙汰なりしかは、一家大に驚き詮術とても知らざりしが、是より先き義兄は實家淺見氏の急使に接し匆皇出で去りたる折柄なれば、母は予に命じて義兄を呼び來るべく淺見氏へ使ひせしむ、時に淺見氏も亦藩命ありて縛に就き、一家騷擾中なりしかば義兄に逢ふて母の言葉を傳へしに、義兄は胸中既に覺悟する所やありけむ實父に見えて密議をなし、纏て衣襟を正し大小を手狹み予と共に我家に戻れり、途中何となく物騒しく掛れ掛れの聲頻りなれども、幼き予の心には方に來るべき我家浮沈の兆候ならむとは夢にも悟らず更闌けて家に歸れば間もなく藩の用人某來り訪れて客室に進み、義兄と口角沫を飛ばして激論しつつあるは唯事ならずと思はれたり、此の時母は再び予に命じて親戚遠藤氏を迎へ來らしむ、予は眞夜中なれども月の光に前途を照されて遠藤家に到れば、主人は既に寢に就けるを以て要領を得ず、路すがら東雲告ぐる鷄鳴を聞きつつ我家を距ること五六町程なる小暗き藪の邊りに至れば、端なくも母の來るに逢ふ、母は予を透し見て百合若にてはあらずや、次郎彦は只今刺客の爲めに斬られ、一命覺束なければ、急ぎ此の由組頭に訴へむとて爰處まで來りたりと、予は不意の凶變に接し深き考とても無けれど、一時其の訴へを遮り母の心を慰めつつ歸りて見れば、家兄は血に染まりて玄關の前に瘞れ、祖母は悲歎の餘り其の側に伏して正體



児玉源太郎の実像に会う

作家 古川 薫

日露戦争に従軍した將軍のなかで、わたくしが最も敬愛しているのは、児玉源太郎である。いっぽうで乃木將軍も好きだ。ある作家による誹謗中傷で毀誉褒貶にまみれたとはいえ、乃木は世界的な知名度において、やはり一頭地を抜いている。その武士道的ノーブレス・オブリージは、国籍や時代を超え二十世紀の伝説ともなっている。日本国内には乃木希典を祀る神社八社がある。私的な祠をあわせれば、無数といってよいほどで、なお多くの信者を集めている。軍神乃木の位置は不動のものである。

それにくらべて、児玉源太郎の名を知る者は、日露戦争を記憶にとどめる高齢者、出生地の地元民および近現代史に関心を寄せるわずかな知識人であり、若い世代にいたってはほとんど無名の存在にひとしい。それでもわたくしは、児玉源太郎を敬愛してやまないのだ。異能にめぐまれて幾多の功績をたてながら、この人は黒子のような生涯を遂げた。児玉源太郎の右に出る清廉剛毅かつ無欲な將軍はいないのである。乃木がよく武士に譬えられるが、児玉もまた毛利元就につかえた勇猛な武州児玉党の流れをくむ野武士にほかならなかった。今なぜ児玉源太郎かと問われれば、人間性喪失のプラグマティズム謳歌の現代においてこそと言わなければなるまい。

いったいに日本人の現代史認識は、大雑把にいつて総理大臣を目安にしており、政界の頂点に立った人物のみを崇める傾向は、わたくしが生まれ育った山口県においていちじるしい。初代内閣総理大臣伊藤博文以後幾人の首相を輩出したということが最大関心事であり、したがって総理大臣になれなかった児玉源太郎の名も、やがて薄れていくのだ。こうした傾向はひとり山口県にかぎるまい。児玉源太郎が宰相となる機会を得ていたら、その軍歴とともに日本近現代史の主要人物として名をとどめたのではないかと、そんな仮定もせんないことだが、常々わたくしは考えるのだ。

児玉は陸相、内相、文相を歴任、早々と辞任した乃木の後任として台湾総督もつとめ、めざましい実績をみせている。日本最高の戦術家との折り紙を、ドイツ参謀本部の俊秀メッケルから授けられ、日露戦争での功績をうたわれる。行政官としても非凡な才能を認められながら、ついに宰相の座にたどりつかなかった。わたくしはそのことを『天辺の椅子―日露戦争と児玉源太郎』にくだいほど書いた。つまり源太郎は、最高に有能なナンバー2としての一生を終わったのだが、要するにそれは、明治維新に関わる第三世代という生まれ合わせの不運であった。軍人としても山県有朋、大山巖をはじめとする古手の人材が、源太郎の頭の上をいつまでも塞いでいたのだ。そして最大の不運は、日露戦争

終結の直後、急死といってよい状況で命が燃えつきたことである。五十五歳とは、まったく意外の早世だった。

源太郎の死は終戦翌年の明治三十九年（一九〇六）七月二十三日だが、その二カ月前の五月二十二日、首相官邸で重要な会議がひらかれている。「満州問題協議会」というのであった。この会議は戦後の満州をめぐる微妙な問題を協議したのだが、実質的には児玉参謀総長のつるし上げに終始した。要するに軍政署を廃止して、陸軍は満州から手を引けというのだった。日露戦争終結直後、アメリカの鉄道王ハリマンが満州の東清鉄道の買収に乗り出し、日本政府内でもそれに応じようとする気配があった。反対論が声をあげ、ハリマンとの予備協約は破棄されたが、満州の市場開拓に乗り出そうとする米英の露骨な動きをみて、軍政署による牽制を強めようとする源太郎への批判が高まっていた。

日露戦争で日本に肩入れした米英からは、軍政が解かれず自由に満州市場に手出しできないことへの不満を、彼らは日本政府にたいして鳴らしはじめる。満州の軍政をやめて外国との摩擦をやわらげるべきだというのが日本政府大方の意見だが、源太郎はなお軍政の手綱をゆるめるべきではないと抵抗した。

しかしこの日の会議は多数意見に押し切られ、「軍政署は順次廃止し、満州の諸機関を平時に組織する」という結論を出しておわった。源太郎は大いに不満だった。このまま列強に満州を開放すれば、ふたたび分割競争の場となり中国全土が「東洋の蜜」にされかねないという危機感を、源太郎は抱いていたのだ。

七月十三日、つまり死ぬ十日前、源太郎は南満州鉄道設立委員長を任命されが、そのときすでに源太郎には一言の相談もなく南満州鉄道総裁が後藤新平に決定していた。源太郎が猛烈な不満をとなえたことは想像にかたくないが、まるでどさくさに紛れるように、源太郎は急死し、その間の事情は曖昧に消し去られてしまっている。急死する前日、軽い頭痛を訴えている源太郎の前にあられたのが、後藤新平である。児玉家の記録では、彼のほうから訪問してきたことになっているが、後藤は「児玉に招かれた」とし、総裁就任を辞退する旨を述べに行ったのだが、是非にと児玉から説得されたあとで語っている。



後藤と児玉源太郎とのそのときのやりとりは、立ち会った人の証言がないので不明のままだ。後藤は源太郎の死を悼み「弔い合戦のつもりで、断然総裁の座を引き受けた」という意味のことを言っている。

日露戦後の満州問題にかかわる最も重大な局面が展開される矢先、キーマンであり、一部の人間にとつては最も目障りな存在の源太郎の急死に、疑いをさしはさまないのを不自然としなければならぬ。医師の診断を経ず孤独死した者の遺体は、現代では司法解剖がなされるはずだが、それもなかったため、確たる死因も不明なのだ。児玉源太郎の死については、あらためて検証の必要があるというのが、かねてからのわたくしの所論で、それについては前掲拙著でもすこし触れているので、このたびの『藤園記念画帖』の付録にある黒田甲子郎による「藤園小伝」に期待をかけたが、略伝であり終焉の記述は宿利重一の伝記と大差がなく、それも不自然に説明が簡略化されている。このことに関して、わたくしは本書を熟覧するうちに、あることに気づいた。それは源太郎將軍の長男秀雄の「緒言」中に、ゆくりなくも露出した意味深長な言葉である。

源太郎絶命前後の様子は、児玉家の家族や使用人の証言が詳しくのこされている。その朝、家族が事切れている源太郎を発見、医師が呼び込まれる以前、前夜源太郎を訪問して帰って行った後藤新平からの電話が早朝かかってきて、源太郎に異常はないかと尋ねてきたことに妻松子が首をかしげたなども証言として記録されている。それら人々の言動の時系列的な説明が、簡略というよりむしろ省略され、雑な描写になっていることは、諸書に共通する叙述でさえある。わたくしも不満だったが、このたび児玉秀雄が本書の緒言で次のように述べていることに特別の関心を抱いた次第だ。

「—— 伝記ノ執筆ヲ知友黒田氏ニ囑シ家伝ノ記録ト先輩ノ談片トヲ取舍（捨）シテ一篇トナス故ニ篇中往々誤謬アルヲ免レズ 幸ニ先輩並ニ史家ノ推教ヲ仰ギ後日之ヲ訂正スルヲ得バ不肖ノ面目之ニ過グル無シ」

秀雄は源太郎絶命前後に関わる詳細な「家伝ノ記録」の省略ないしは不整合を指摘しているのではないかと、わたくしなどは推測するのだが、むしろこのことは児玉源太郎思い出のめずらしい画帖の解題をこころみる本稿の目的とは無縁の論議であり、「幸ニ先輩並ニ史家ノ推教ヲ仰ギ後日之ヲ訂正スルヲ得バ不肖ノ面目之ニ過グル無シ」とする源太郎の遺児児玉秀雄の意志に沿って、いずれの日にか新資料を得て真相に迫る日を待つことにしなければならぬ。

さて『藤園記念画帖』は、まさに稀覯本というにふさわしく、よく掘り出されたもので、復刻者松村社長の執念による快挙というしかない。本書の存在はわたくしもかねて仄聞していたので、『天辺の椅子』執筆のころ、編集者に頼んで八方手をつくしたのだが、入手できなかった。

〈本書は児玉家が「源太郎十三回忌記念」として真情こめて作成し、多分引き出物に使ったのではないかと思います。（略）他の派手な家でしたら、沢山作って大々的に配ることもあったかもしれませんが、御存知の通りのお家柄なので、必要なだけ造り必要なところだけへ送ったのではないかと思います。そんなこともあって地元、中央を問わず図書館にも無いのでしょう〉



影撮ノ中陣滯臺烟

この松村社長からわたくしへの手紙にもあるように、一般の手には渡らない小部数の私家版だったのである。〈当時も日本最高の凸版印刷なので写真の仕上がりも鮮明です〉と、同じ手紙にある通り、たしかに収録されている写真類は、当時の印刷物にありがちの不鮮明な複写でなく、いきいきとした人物の表情や建物などふくめた情景をリアルに伝えていく。戦場での記念写真や日常生活風景その他ふんだんに収められた古写真の山から、児玉源太郎の実像が浮かび出てくるのが楽しかった。ベルリンで撮ったと思われる「明治二十五年、洋行中ノ撮影」とある横向きのポートレートが、恩師メツケル將軍の肖像写真とそっくりであるのも面白かった。

詩人でもあった藤園將軍の筆跡が多くちりばめてあるのも得がたい写真帖だが、わたくしにとって印象的だったのは、家族の写真だった。源太郎伝の初期にしばしば登場する姉久子の武家の女然とした写真もなつかしく、そしてきりりとした美貌をうかがわせる源太郎の妻松子の風姿を、わたくしはある熱い思いをもってながめたのだ。この写真に早く出会っていたら、若き児玉源太郎陸軍中尉と芸者松龍のロマンスを、もっと情緒豊かに描けたかもしれないと思ったりもしたのだった。



子 松



子 久 玉 兒
姉ノ 蘭 藤



(ハンフの写実はすべて本書より)



『藤園記念画帖』を推薦する

東大名譽教授 伊藤 隆

本画帖は、藤園・児玉源太郎の十三回忌に、その長男の秀雄が作成して関係者に配布したものである。その性質上大部数が印刷されたとは思えず、国会図書館にも所蔵されておらず、古書店にも殆ど見受けることがない。

児玉は、毛利藩の支藩徳山藩の下級武士の出身、戊辰の役に防長諸隊の一つ猷功隊の一員として五稜廓まで戦い、戦勝の後、選ばれて残留、京都・大阪で仏式の軍事訓練を受け、以後陸軍軍人として精励、佐賀の乱、神風連の乱、西南戦争(熊本籠城組)、メッケル將軍の薫陶を経て、明治二十二年には少将に昇進、陸軍大学校校長、陸軍次官のち参謀本部参謀を兼ねて日清戦争の後方支援を担当、戦後出征軍の凱旋にあたり、後藤新平を事務官長として登用し、自らは検疫局長をも兼ねて伝染病を予防、その間に台湾の港湾標識・海底電線の敷設に関わった事もあり(日清戦争での功績に対して男爵)、明治三十一年台湾総督(後藤を民政長官に登用し、大きな治績、その功で子爵)、さらに陸相を兼任、それを辞してのち内務大臣、日露戦争を前にして、大山巖の下で参謀次長、満洲軍総司令部の設置と共に、大山元帥の下で總参謀長として出征、戦勝ののち参謀総長という輝かしい経歴を持って陸軍の中枢に駆け上ったが、明治三十九年七月二十三日突然脳溢血のため逝去した。

この画帖の前半は「遺影残墨」で、写真(当時のことだからスナップはなく、各時期の記念写真と詩、来簡―品川弥二郎、谷干城、長期に亘って上官であった大山巖など、自身の家族宛書簡)と自身の字、さらに山県有朋、品川、毛利元徳、伊藤博文、野村靖、桂太郎、乃木希典、野津道貫、西寛二郎、佐久間左馬太といった関係の深かった人びとからの書簡(単なる挨拶状ではなく内容のあるもので、史料的な価値が高い)を写真やコピーで複製したもの、そして後半は「家伝ノ記録ト先輩ノ談話トヲ取舍シ」た黒田甲子

郎による充実した伝記「藤園小伝」からなる。児玉の伝記の決定版はマツノ書店の復刻している宿利重一の『児玉源太郎』であるが、それと共にこれも独自の価値を持つものである。

私は平成八年に児玉の遺族のお許しを得て、かなり大量の、本画帖を作成した児玉秀雄の関係文書を尚友俱樂部にお預かりすることが出来た。尚友俱樂部が援助してくれ、尚友俱樂部調査室の皆さんの手で目録を作成し、解読をして、また数人の友人の援助も受けて、書簡・電報類を纏めた『児玉秀雄関係文書』上・下を本年刊行した。『藤園記念画帖』に収録されたものを含む児玉源太郎の関係文書は第二次大戦中に徳山に疎開されていた所、そこが空襲に遭って焼失の憂き目にあつたという。

私共がお預かりしている「児玉秀雄関係文書」に若干の児玉源太郎関係の文書が含まれている。その中で、児玉源太郎が関わっていたと思われる桂太郎の上奏文案(明治三十五年十二月のものと推定)を見つけ、これをコピーして貰って調査し、当時連続して行っていた尚友俱樂部の近代史研究会の第二回に「税金と議会」という題で話をした(のち『日本歴史』五九六、平成十年一月号に「桂上奏文をめぐって」と題して掲載、さらに著書『近代日本の人物と史料』(青史出版、平成十二年)に収録)。「小伝」でも触れているが、この時期の児玉は軍人であると共に、政治上でも活躍しており、特に伊藤博文・桂太郎の間の調停をしていた。『伊藤博文関係文書』『桂太郎関係文書』(最近千葉功氏の手で出版された)に多くの児玉書簡が収録されている。その他でも『品川弥二郎関係文書』『山県有朋関係文書』『後藤新平関係文書』中にも書簡が残されている。

現在尚友俱樂部に保管されている「児玉秀雄関係文書」中にも、源太郎関係の、その他の興味深い史料も含まれている。いずれ全体が国会図書館憲政資料室に寄贈され公開される事になる予定である。いずれにしても本書は児玉をめぐる史料状況にいくつかの興味深い情報を追加するものとなる。